

## 福祉サービス事業所の抱える課題の研究を卒業研究として 推進した結果にみる教育観点での効果

### The educational effect analysis of the graduation study which tackled welfare service facility's issues

横井健二\*

Kenji Yokoi

#### Summary

Generally speaking, through collaboration with an outside organization, students can learn a lot of useful and versatile things. In this sense, this type of collaborative study can be said a very effective educational method for students.

We have been pursuing collaborative design study with the welfare service facility in Ena-city for two years as a graduation study. Students have been learning many things through the collaboration work. As a result of two year graduation studies, we found that students learned very useful and versatile things very effectively.

In the first year, students learned how to define a design research subject from their feasibility study. And in the second year, students learned ethnography method skill. These are good examples to recognize effectiveness of collaborative study with an outside organization.

キーワード：福祉サービス事業所、卒業研究、イメージ構築、ブランディング、アート制作

Keywords : welfare service facility, graduation work, image building, branding, art production

#### 1. はじめに

障がい福祉サービス事業所とは、雇用が可能と見込まれる 65 歳未満の障がい者を対象に就労に向けて生産活動の体験させる、あるいは能力向上を目的とした訓練をおこなうなどの多様な就労支援を実施している施設である。こういった事業所が良好な活動を継続的に進めるための課題は数多く存在しているが、事業所と外部との関係でいえば、地域企業と住民からの協力と理解を得ること。そして、生産活動の結果として生み出す制作物の販売が良好におこなわれることの二点が考えられる。

筆者の研究室では、この障がい福祉サービス事業所

の抱えている対外的な課題をデザインテーマと捉えて、平成 26-27 年度と 2 年度にわたり卒業研究の対象として継続的に取り組んできた。研究テーマとなるのは前述した対外的観点での二つの課題にも対応して①事業所のイメージ作り研究、②制作物の研究の二つである。

本稿では、学外の組織の抱える現実的な課題を卒業研究として取り組むことによって得られた教育の効果というものを、一般的な効果並びにデザインの学びという観点から評価、分析した結果を報告する。

なお、研究テーマ推進にあたっては「岐阜県恵那市福祉協議会障害福祉サービス事業所明智ひとつばたご [1]」にご協力をいただいた。

---

\*情報学部 情報デザイン学科 プロダクトデザイン専攻

## 2. 活動概要

### 2.1 研究テーマの設定

本研究を進めることに至った経緯についてここで簡単に触れておく。恵那市福祉協議会に勤務されている方の息子さんが筆者の研究室の卒研究生として在籍していた。このときに、この卒研究生が母親から制作物についてデザインを学ぶ学生として何か考えられないかとの問いかけを受け、それを筆者に相談として投げかけてきたことに端を発している。

この卒研究生と筆者で構想を簡単な企画書にまとめたが、結果的には当該卒研究生が卒業研究の締め切りに追われ始める時期になり、企画書が日の目を見ずに終わってしまう結果となった。しかし、新たな4年生を卒研究生に迎えるにあたり、当該卒研究生が下級生の新卒研究生にこの研究テーマをやってみないかと相談を持ちかけ、同意した二名が着手することに至った。

元々は制作物の検討が研究テーマの端を発する切っ掛けになったと前述したが、研究テーマの設定としては、1章で述べた①イメージ作り研究と②制作物の研究として二つのテーマを対象としている。これは、筆者が事前打ち合わせとして、障害福祉サービス事業所明智ひとつばたごを訪れて、責任者の方と相談をさせていただいた後に、面白いアイデアの詰まった制作物ができたとしても、ゆくゆくはその制作物が評判を呼ぶことで、その制作物の評判が他の制作物の知名度や評判にも影響を及ぼすことになるブランディングの考えが必要と判断したために、このようなテーマの捉え方とした。

### 2.2 研究着手前の事業所での作業、制作物の状況

事業所における作業は事業所近隣の工場の生産部品の一工程を請け負うものと、事業所独自の作業の二つに分けることができる。前者は単純な作業で工賃が直接的な収入となる。後者では切干大根や干し椎茸などの農産物と、牛乳パックの紙を再利用して紙漉きはがきを制作するものなどがある。この制作物は近隣施設の販売場所において販売され、その売り上げが事業所の収入となっている。また前述の二つの作業以外には、アルミ缶を収集しリサイクルするなどの作業をおこなっている。

制作物の種類はあまり多くはない。制作物例でいえば、この事業所外での商品を仕入れて、仕上げ加工、梱包などをするものがある。これには綿靴下や化学繊維を編んだ食器洗浄用のたわしなどがある。このような制作物は、余分な糸の始末の加工や販売用のためのタグ付けと梱包をおこなっている。

## 3. 1年目の活動概要

平成26年度に実施した卒業研究では、女子学生と男子学生の各1名ずつによるペアによって推進した。筆者の研究室ではなるべく複数の学生による卒業研究を奨励している。その理由には次に示す①～③の三つがあって、①成果が必ずレベルアップする。②グループ活動の貴重な経験を積むことができる。そして、③一人で悩んでしまわずに必ず活路を話し合いで見つけることができる。最後の1点は筆者の経験上もかなり重要な観点だと捉えている。1名だと壁にぶつかってしまうと、そのまま動けずに悶々としてしまうことがあり、指導教員と一对一の話し合いになる。こうなると、どうしても受け身になって指導教員にどのように進めて良いかの解答を聞く姿勢になってしまうことが多い。一方、複数人数でテーマに取り組むと、教員がそのグループに入っても、グループでのディスカッションとなり、学生の姿勢が単純に受け身にはならない。この点が良い点だと捉えている。

さて初年度の卒業研究においては、イメージ作り研究ではいわゆるブランディング活動における基本的な仕組み作りをおこなった。具体的には事業所の特徴を見極め、その特徴にふさわしいキャッチフレーズ、ブランドロゴ、そして制作物を販売するときその販売物を梱包するパッケージ用のタグデザインのシステムを作りあげた。

制作物の研究では、牛乳パックの紙漉きはがきに付加価値を加えたものにするとの意図から発想した、版画はがきの制作とマーブリングを施したはがきの制作をおこなった。

### 3.1 1年目におけるイメージ作り研究

事業所の特徴の見極めは、まず福祉協議会の使命である「恵那市民の誰もが地域の中で互いに助け合い、安心して暮らせる福祉のまちづくりの推進を使命としています」を踏まえ、地域性、作業のためにこの事業所に通所されている障がいをお持ちの方々や職員の方々の意思を盛り込むことが重要と考えた。通所者、そして職員の方々の作業に臨む姿勢は真摯で熱意のこもっていることは、学生と筆者が事業所での制作物の試作や打ち合わせを通じて、強く印象に残ったことである。このことを事業所のキャッチフレーズ作りに盛り込んだ。作成したキャッチフレーズは「心いっぱい、てづくり」である。このフレーズは、事業所でおこなわれている種々の活動のすべてにわたって、通所者と職員が気持ちを込めて、一つひとつの作業に手を抜かずにおこなっている事実を表現しようとしたものである。

また、視覚的なデザインでは、事業所の所在地である



図1. 明智ひとつばたごロゴマークデザイン



図2. 販売品タグデザイン  
[版木アートの版画はがき事例]

恵那市明智町には日本大正村という町全体の文化遺産を生かした施設があり、大正ロマンという独特の雰囲気を持った地域であり、このことを活用した。そして事業所名の「ひとつばたご」は樹木の名称であり、この地域に群生するモクセイ科の植物で、5月ごろに数ミリの白い花を咲かせ、遠くから見ると樹木全体が綿毛で包まれたように見える。ひとつずつの個々の花を見ると、その花卉は端を束ねた4つの細い白い糸が広がったような愛らしい形をしている。

ロゴマークのデザインと販売品用タグデザインは、図1、2に示すものとした。ロゴマークはひとつばたごの白い糸を束ねたような花をモチーフにしている。販売品に取り付けるタグには、その制作物が「心いっぱい、てづくり」が示す、一品一品が手作りであることを裏書することを象徴する意図から、ひとつばたごの花をモチーフとした落款を入れた。「ひとつばたご」のひらがな部分のロゴデザインの書体は、学生が独自に大正ロマンイメージとひとつばたごの花の印象を盛り込むことに腐心したデザインである。

図2のタグデザインは後述する制作物検討の成果である版木に立体物を貼って版木アートと称する版画はがきの販売を想定したものである。

タグの表記に使用した書体は、市販品書体から大正・昭和時代を象徴するロマン書体である。右上にキャッチフレーズである「心いっぱい、てづくり」を横書きで配置した。販売品目名は縦書きとし、右下にはひとつば

たごの花卉の落款を配置している。キャッチフレーズと落款の二つの要素は、販売品が明智ひとつばたごの通所者による、精魂を込めた制作物であることを購入者に伝えるメッセージとなっている。

またタグの用紙は、手作り感をその用紙からも感じてもらおう意図で漂白をしていない用紙であるクラフト紙を使い、生成りの風合いを活用している。生成りの風合いは、自然素材の印象を持っているために、このタグが取り付けられる制作物が引き立って見える効果があると考えて、採用したものである。実際取り付けてみるとその意図が正しかったと、関係者間でも確認した事項である。

### 3.2 1年目における制作物の研究

次に制作物の検討であるが、まず事業所での通年の作業状況、通所者の障がいの状況の確認をおこなった。その結果として実施作業のなかで、創造性の高いものでは、牛乳パック手漉きはがきにさらに契り絵を配したものと、網代網コースター・鍋敷きである。前者は一枚ごとに通所者の作成したいイメージの絵を契り絵で制作している。しかし、創作にあたって創意工夫の度合いは限定されていて、絵柄自身の完成度があまり高くないことや、はがきの盤面に対して絵の大きさや配置のバランスが取られていないなど商品の観点からはその魅力はあまり高いとはいえない。後者の網代網とは、桧の薄い板を短冊状に細く切ったものを編んで作成し、周囲を千代紙の帯で装飾した制作物である。完成度が高いものとはいえるが、一般的に販売されている同様の商品に比して、購入者の興味を引き付けるまでには至っていない。

卒研学生と筆者が相談した前述のような分析結果から、制作物を検討するための現行の通所者を対象とした場合に、作業上で配慮する要点は次に示す、①～③の三点とした。

- ① 作業は単純な内容のものが向いている
- ② 高度な創造性を必要とするものは不向きである
- ③ 作業には丁寧に関心を込めておこなう。そして、それが制作物にも表れる

この三項目を踏まえて、制作することとした制作物は次の二種類である。制作物の前提として考えたのは、牛乳パック手漉きはがきに付加価値を付けて、独自性を持ったものにする案である。第1案は、木版画である。これは、版木に通所者が厚みの薄い立体物を自由に貼り付け、立体物の構成の面白さを版画で移し取る制作物である。実用品というよりアート作品的な

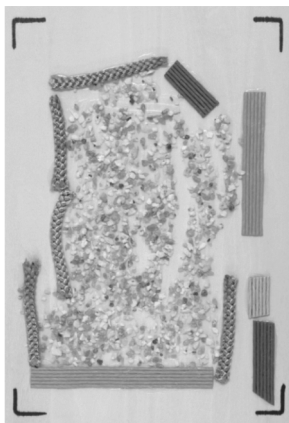


図3. 版木アート1



図4. 版木アート2



図5. 版木アート額装例



図6. 版画はがき額装例



図7. マーブリング1

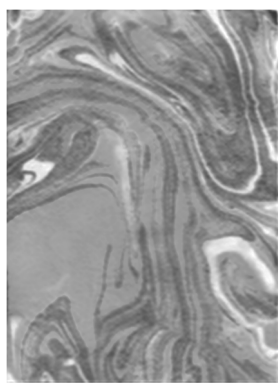


図8. マーブリング2

発想である。名称は図2にタグ事例を示したが、版画自身をコラージュ版木アートと名付け、版木自身もアートとしてみることで、版木アートとした。

第2案は、マーブリングという墨流し技法を用いて水面に浮かぶ絵の具の模様をはがきに施して、はがきの付加価値を高める案である。

図3、4に版木アートの作品例を示す。図3は細かい砂の粒を丁寧に一つずつ貼り付けた作品であり、根気と構成力が活かされる作品である。砂粒の周りにはクラフトテープと呼ばれる紐を並列して貼り付け、こ

のテープと中央の砂粒が微妙なバランスで配置されている。一方、図4の作品2は紙紐を渦状の形に成形して、数多く配置、構成した作品である。これも渦状にした紙紐の輪が大きさ、向きなどを絶妙なバランスで貼り付けてある。紙紐を木工用ボンドで貼り付けようとすると、直ぐには思い通りの形には固定し貼り付けることはできず、一定時間指で押さえていなければならない。制作には大変根気を必要とする作品である。

なお版木というのはインクを付けて版画を刷るためのものである。しかしそれに関わらず、この版木自身を眺めていると、作品個々に独特の味わいがあるアート作品と呼べるものになっていた。図5はこの版木アートを額装した例で、立派なアートとして通用するレベルになっている。写真では小さくて確認し辛いですが、版木アートの右下に例のひとつばたごの落款を押してあることも、この作品の価値をさらに引き立てている。

図6は版木を用いて文字通り版画を作成し、これも図5と同様に額装したものである。本稿では細かくは言及しないが、一つの版を用いて異なる色で版の方向を変えながら複数回の色付けをした例である。作品に深みが出て、面白いニュアンスを持った作品に仕上がっている。

図7、8にマーブリング作品の事例を示す。マーブリングとは日本においてはいわゆる墨流しと呼ばれる技法である。水に浮かぶ特性のある絵の具を落とし、波紋状の模様になったものを紙で移し取る技法である。多少のテクニックが必要となるが通所者の方々も数回試していくうちに、相応にコツを覚えて面白い作品作りをすることができていた。

また卒研究生が工夫をし、いくつかのテクニックを編み出し、その手順に従うと、ある種の特定のパターンを作成することができるようになった。また使用する絵の具もマーブリング専用の絵の具の他に、油絵具などでも独特のマーブリングパターンを得ることができ、これを試行錯誤の末に発見し、異なる作風の作品を意図的に制作することができるようになった。

### 3.3 デザインマニュアル

また、イメージ作りでの大きな研究成果は、ロゴマーク類の使用に関するマニュアルをまとめたことである。筆者自身が前職の企業勤務時代にブランドマネジメントの部門に属し、こういった業務をしてきたノウハウを伝え、学生がまとめたものである。かなりしっかりとしたレベルまで記述し、まとめることができた。イメージ作りというものは、短期間で確立できるものではなく、継続的に統一したイメージで活動が続

## タグデザイン 商品名 + 落款 (\*落款は 10×10 を使用 \*印刷用紙は明るい色彩のクラフト紙の使用を原則とする)

### パターン A

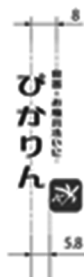
通常タグ (幅 50cm より大きい) に利用する



フォント : DF ロマン風 A Std W7  
商品名 30pt  
商品名小文字は 10pt

落款の高さは商品名に少しかかるように配置  
商品名とサブタイトルは上で整列させる

### パターン A 例

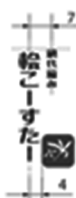


### パターン A 2行の例



### パターン B

細めのタグ (幅 50cm 以下) に利用する



フォント : DF ロマン風 A Std W7  
商品名 22pt  
商品名小文字は 10pt

### パターン C

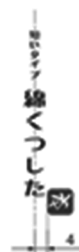
幅にゆとりがあるものや縦巻きのタグに利用する



フォント : DF ロマン風 A Std W7  
商品名 30pt  
商品名小文字は 12pt

### パターン D

落款 8×8 を使用する



フォント : DF ロマン風 A Std W7  
商品名 22pt  
商品名小文字は 10pt

4

図 9. タグデザインマニュアルページ例



図 10. 綿靴下にタグデザインを付加した例

けられることが重要であるが、こういったマニュアルが存在すれば有効なツールとなる。図 9 はマニュアルのページの一例で、タグデザインの一番基本となる商品名と落款のそれぞれの大きさ、配置、使用書体について規定しているものである。また図 10 はマニュアルに基づいて作成したタグを施した販売品の事例であ

る。これは一番の売れ筋の商品である綿靴下の例を示している。このタグは帯状の紙を商品に巻き付けるような形式で付けられるようになっており、商品の裏面に販売者名などの付帯的な情報が記載されるようなデザイン上の工夫をおこなっている。

#### 4. 2年目の活動概要

平成 27 年度の 2 年目の活動は、女子 2 名の卒研究生が担当することとなった。大きな括りとしては、イメージ作り研究と制作物の研究を継続することとした。具体的な活動項目は、1 年目の活動で得られた成果を明智ひとつばたごの関係者と相談して決定した。

イメージ作りについては、大方の視覚デザイン要素とマニュアル化については、昨年度に研究をおこない完了している。このために、実質的な広報活動を主体としておこなうこととした。

具体的に実施したのは、二点でパンフレットデザインと Web サイトのデザインである。

制作物の研究については、昨年度の活動が新聞に掲載されたり、市役所のロビーで「こころいっぱい、てづくり展」を開催し、来場者に好評であったりするなどの

成果を収めた。しかし、当初念頭に置いた新しい販売品につなげるとの観点では、残念ながら版画アートはがきやマーブリングはがき〔商品名としては「色模様はがき」と名付けた〕は、売り上げに貢献しているとはいえない状況であることが分かった。これはある意味無理からぬことで、販売場所は大きく分けて三種類があるが、その特性からもうなずける内容であった。その三つの販売場所とは、まず福祉協議会関係の施設である福祉センターがある。ここでは、受付脇などに机を置いて他の福祉関係用品〔身体障がい自助具や成人用オムツなど〕と併置されて販売されている。

次に、恵那駅にある恵那市観光協会が運営する地域の特産品を販売する観光物産館がある。こちらは、「えなてらす」と称し、多くの観光客が訪問することもあり、売り上げは期待できる。しかしながら、他のお店や施設で作られたたくさんの特産品があるなかで、明智ひとつばたごの販売品だけを目立たせるわけにもいかず、他の多くの特産品の中に埋もれてしまっている。

最後の販売場所は関係者の知り合いが経営する喫茶店などに置いてもらっての販売である。こういった場所では、あまり多種の販売品を置くことはできず、販売活動は限定的にならざるを得ない。

以上のような結果から判断したのは、独自性ある制作物やアート作品を制作しても、そういった商品を現行の販売場所にて購入者となるお客様に対してアピールする環境作りは困難であり、単に新たな制作方法やアート作品のあり方を研究しても、実効は少ないとの結論を出した。その結果として、新たな制作物の研究は通所者の方々がアート制作に意欲的に取り組んでくれて、作業後に楽しかったという効果を第一の目的に実行することにした。

この考え方は明智ひとつばたごの関係者の方々もある意味同じ思いがあったようで、賛同をいただき、2年度目の制作物研究の方向性を決定した。

本稿の執筆中の段階では、まだ平成27年度の卒業研究の成果が完全には出ていないこともあり、ここでの報告は執筆時点〔平成27年10月19日〕での内容になることにご容赦をいただき、これまでに実施してきたことの概要を説明する。

#### 4.1 2年目におけるイメージ作り研究

まず、イメージ作りに関しての活動であるが、パンフレットのデザインと Web デザインに取り組むことにした。

パンフレットは、これまでは A3 大の用紙を二つ折りしたものを利用されていた。このパンフレットのデザインを一新するとともに、新たに一つのタイプを加え

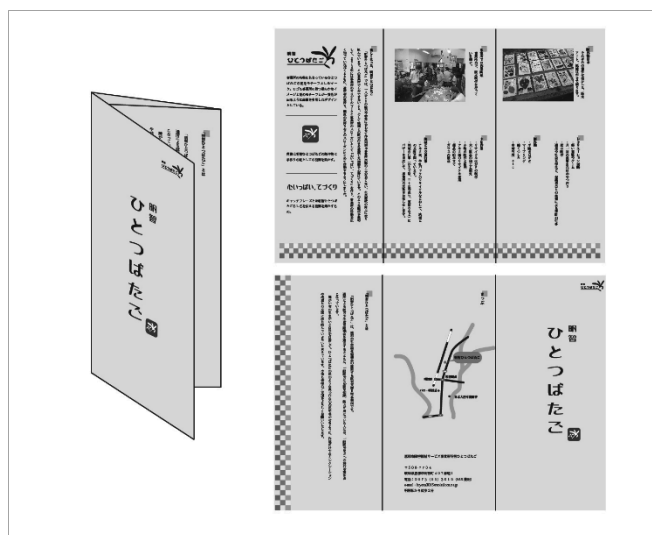


図 11. A4 タイプ三つ折りパンフレット

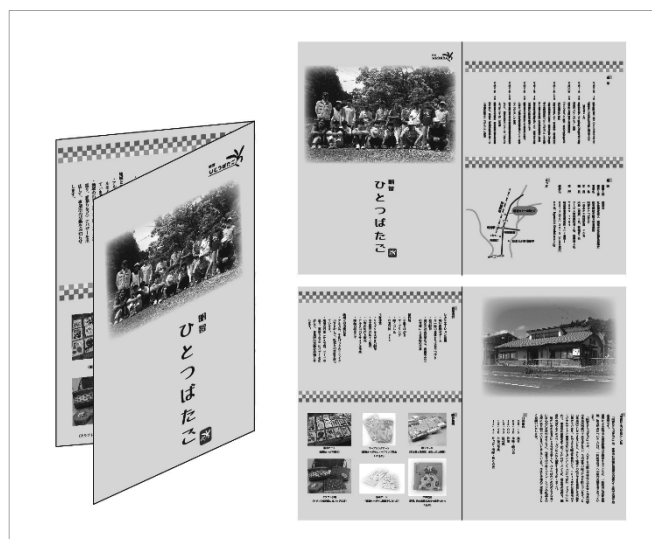


図 12. A3 タイプ二つ折りパンフレット



図 13. Web デザイン案

て二種類のパンフレットのデザインを完成させた。基本的な記載内容は同様であるが、そのパンフレットの

使用目的によるタイプ別の提案である。

最初のタイプは、A4用紙に両面印刷をおこない、それを三つ折りにするタイプである。このタイプの想定用途は、地域のイベントに明智ひとつばたごがブースとしての店舗を設けて直接的にお客様に制作物、生産物を販売する場合に配布するものである。用途とその目的から、パンフレット自身があまりかさばらずにブースに置いて自己主張をせずに興味を持たれたお客様だけが手に取るとの想定で、小さ目の大きさの変形タイプにした。

二番目のタイプは明智ひとつばたごがその活動推進上で必要となる外部組織との交渉等の際に配布する目的のパンフレットである。ある意味企業における企業紹介パンフレットと呼ぶものである。したがって体裁はA3用紙に裏表印刷をしてA4見開き4ページとして相応の重みを感じるデザインを意識したものとしている。

二種類のパンフレットのイラストを図11、図12に示す。デザイン上の印象を表現する要素として、大正村の着物の柄を意識した市松模様を冊子の視覚デザイン要素に活用している。

次にWebサイトであるが、こちらは現時点では第一次案が完了した状況である。このことを前提に説明をさせていただく。Webサイトというのは、色々と細かく情報を掲載して、対外的にアピールし情報発信するのが理想的ではある。しかし、Web制作の専門家に依頼して制作しても、その後の更新作業が上手くなされないと、サイトは訪問者も減少し価値を持たないものになってしまう。そこで今回のサイトデザインの骨子とした考え方は、基本的な情報、例えば事業所紹介、所在地やそして電話番号などの変更の少ない情報を福祉協議会サイト内に掲載し、日々の活動や新しい制作物の情報は、ブログサービスをおこなっているサイトに掲載するとの案を提案し、その考えに沿って制作中である。

図13は、福祉協議会のサイトに掲載するいわば基となるサイトのトップページのデザイン案である。このサイトには数ページの情報しか掲載しない予定で、ここから外部のブログサイトへリンクを設けていく仕組みで今後デザインを検討していく予定である。

ブログサイトの選定や具体的なデザインについては、どのブログサイトが適当なのかを総合的に判断して決定する予定であるし、具体的なデザインについてもそのブログサイトの条件などでも大きく差が出てくるので未定である。

#### 4.2 2年目における制作物の研究

一方、アート制作については、初年度の版画コラージュ

ュアートやマーブリング制作で得られた知見をもとに考えるべきことをまとめた。まとめたものが以下の三項目である。

- ① 単純な手順、制作手法のものが向いている。また、作成の過程で気づいた効果などを直ぐに活用して制作している。特に偶然がもたらす面白さなどがあると創造性が刺激され、面白い作品になっていく



図 14. ドリップング 1



図 15. ドリップング 2

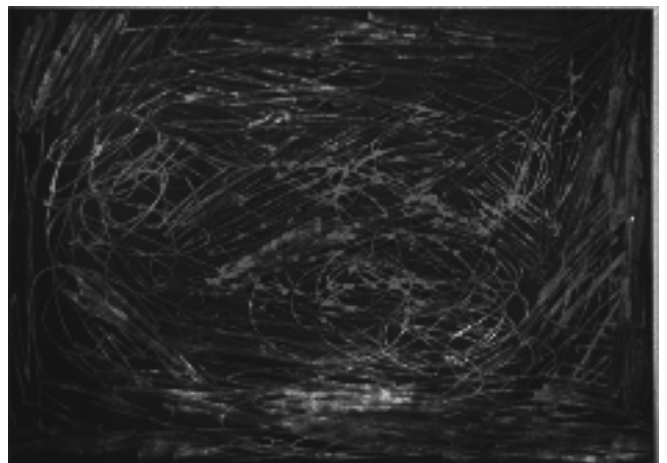


図 16. スクラッチ 1



図 17. スクラッチ 2



- ② 下描きをするなど、高度な創造性を必要とするものは不向きである
- ③ 作業は一つひとつの手順を丁寧におこなっており制作物にもその緻密さ、正確さが表れる

以上のような考えをもとに、これまで二度のアート制作をおこなっている。今年度はあと一回、11月の中旬に実施予定である。

アート制作を実施する日のスケジュールとして二時間で一つの制作手法のものを終えて、午前と午後の一つずつの制作手法に取り組むことにしている。初年度含めて、制作状況を見ていると、個々の通所者の障がいの種類、度合いの差にもよるが、なかなか手を動かさずにいたかと思うと、興が乗ると一気に手早く作業を進めて作り上げてしまう。また非常に細かい作業を丁寧に根気良く続けて制作するなど、制作時の光景は大変興味深い。

今年度の初回に実施したアート制作は、ドリッピングとスクラッチである。前者を午前中に後者を午後に実施した。ドリッピングとは、絵の具を紙の上に垂らし、その垂らした絵の具をストローで息を吹きかけて流し、絵具の流れた跡のパターンの面白さや美しさによって作品を作り出すものである。

スクラッチとはあらかじめ紙の上に、様々な鮮やかなクレパスを塗り分けておく。次にこの色彩の上に黒、あるいは濃い茶色などの色を塗る。そして最後に、爪楊枝などの細い先を持った道具で、表面の濃い色彩の部分を剥ぎ取って、細い線を使って絵柄を描いていく手法である。

図 14、15 がドリッピングの作品である。一方図 16、17 がスクラッチによる作品例である。

ドリッピングは、偶然性がその作品の出来具合に大きく影響を及ぼすこともあり、絵の具の垂らし方や息の吹きかけ方を加減することで、その作風は大きく異なる。このために、通所者の方々は気軽に躊躇無く制作に臨んでいた。

一方、スクラッチのアート制作は下地となる色塗りと二層目の表面の濃い色塗りには、さっさと手が動いて無作為に塗っていく。しかし、最終の爪楊枝による描画となると、急に手が止まってしまっていた。これは知見として前提にした、②の「高度な創造性」を必要とするといったことが大きなハードルとなっているものと思われる。図 16 の作品は、特に絵柄を工夫して何を表現するというのではなく、抽象的な線で描いている。このために、特に描き始めるときにどの部分にどのような線を描けば良いかなどの綿密な計算は為されずに制作を進めていく制作方法である。一方、

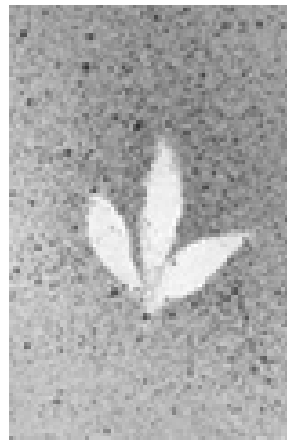


図 18. スパッタリング 1

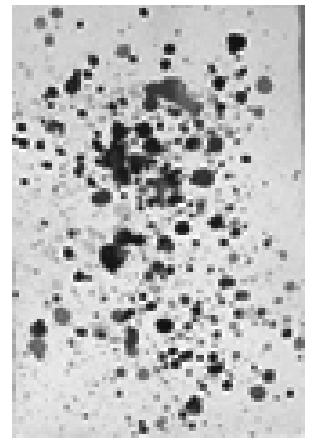


図 19. スパッタリング 2

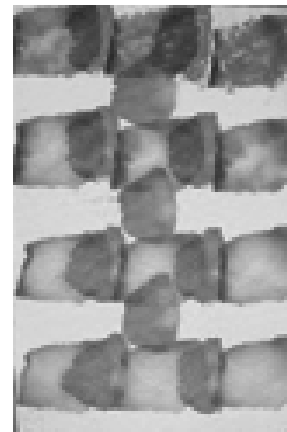


図 20. スポンジアート 1



図 21. スポンジアート 2

図 17 の作品は、人物と犬のような動物、そして空には太陽や雲が浮かんでいる構図で絵が描かれている。このような絵柄になると、いきなり何も考えずに描くというよりは、大まかな絵柄を頭の中に構想してから描き始めることとなる。したがって、他の通所者の方々の作風を見ても、このような絵柄は少なかった。

二度目のアート制作には、一回目の経験を踏まえ、単純な手順、そして制作過程を確認し、その効果を上手く活用しながら制作できる手法のものを選択するようにした。

実施したアート手法は、スパッタリングとスポンジアートである。前者は、金網に絵の具を付けたブラシを擦り付け、絵の具のしぶきが飛んだものを紙に移し取る手法である。この時に紙の上に絵の具のしぶきがかからないようにカバーをすると、そのカバーの形に白い部分が残るという制作ができる。

後者のスポンジアートとは、約 3 cm 立法の大きさに切ったスポンジに絵の具を染み込ませて紙に色を付けていく描画手法である。このときに二色の絵の具を混ぜることで、色のグラデーションを表現できたり、スポンジをスタンプのように押し付けたりすることで、





図 22. スポンジアート制作風景

同じようなパターンを紙面上に連続して表現することができる。

図 18、19 がスパッタリングの手法を用いて描いた作品の例である。図 18 は木の葉を紙の上に置いて絵の具のしぶきをカバーしているがために、綺麗に木の葉の形が紙面上に写し取ることができている。一方、図 19 は、かなり大きい色の粒がしぶきになって飛んでいっている、というよりは絵の具のしぶきが垂れてパターンができているという印象となっている。

図 20、21 はスポンジアートの事例で、図 20 はスポンジに青と赤の絵の具を付けてそれを紙面上に連続的に配置していっている。またその後、赤の絵の具だけを付けて、リズムを取るように配置している。また、図 21 は、緑、赤、青といった絵の具をスポンジに染み込ませ、スポンジの角を利用してスタンプのように連続して押し付けて制作した作品である。押す位置、方向などを一回、一回確認しながら制作を進めている。残念ながら紀要は白黒印刷なので、この美しさをお見せできないのが残念である。

前述した四種類が平成 27 年度に実施したアート制作内容である。制作時の様子はいずれの時も、普段の生活では接しない学生や教員と一緒に作業をするという、ある意味の非日常性といった時間での緊張感と、自分が手を動かすことで、想像もしなかった美しいアートが出来上がっていく楽しさというものを実感として感じているようだった。

制作途中で筆者らが通所者の方に楽しいと質問すると、即座に笑顔で「はい」との返事が返ってきた。また、綺麗な作品に仕上がっているとほめると、恥ずかしそうに笑っていたのが印象的であった。

## 5. もたらされた教育的効果

もたらされた教育的な効果は大きく分けて二分類にすることができる。最初はもちろん一般的な教育効果

の項目となるが、外部の組織や人間に接触することによる学びの効果である。日常触れ合う機会のない、外部組織の物事の進め方やそこで勤務されている方々と接触することによる社会との触れ合いによる学びである。そして加えて、対人的なコミュニケーションの経験である。これについては、大きな効果があることは個別の事例を持ち出さなくとも理解していただけることと思う。実際に 2 年間を通じて学生を見ていて、過程においてもそのコミュニケーションスキルの上達には目覚ましいものがあった。彼らを見てみると、自分の発した言葉や情報が相手側に伝わり、そこである反応や返答を受けることによって、逐次学んでいる印象を受けた。特に、デザイン案の提示というものは、しっかりとその意図や細かい仕組みなども説明しないと分野外の方には上手く伝わらない。そんなところを上手く伝えていくことには、こういった実践的なテーマの推進はまたとない機会といえる。

コミュニケーションの訓練は、学内という閉じた世界であれば、コミュニケーションが上手くいかずに間違った情報を双方が受け取ったとしても、実質的に大きな問題とはならない。しかし、外部組織と約束をしてデザイン業務を進めるとなると、そこに金銭的なやり取りの有無に関わらず、契約といった概念の約束が取り交わされたということになる。したがって、そこで合意されたことが期日までに履行されなければ、そこには大きな問題が発生することになる。その辺は学生もその本質は理解しているかどうかは別として、外部組織の方との約束は学内の約束とは異なると基本的に感じているのか、しっかりと期日を守って活動を進めているのが実情である。また、曖昧な状況であれば学生側から確認をするようなコミュニケーションの基本が身に付いてきているようであった。

以下、次節からは一般論的な教育効果以外のデザインの教育的効果について、検討した項目について解説をしていく。

### 5.1 1 年目の活動でのデザインの教育的効果

1 年目の活動については、教員である筆者としても初めての体験であることから、おぼろげながらしか進め方については構想を持っていなかった。詳細はすべて学生たちと事業所を訪問して実際に障がいを持つ通所者の方々と触れ合って、まず第一回目のアート作品制作の試みをしてから見えてきたことである。

一年目である平成 26 年度の活動では、どのような制作物を作ることができるかは、全くとっかかりの無い状態でのスタートだったが、制作物を販売するとの目的から、制作物から複数の制作物ができるような版

画的な制作物が良いと思い、開始したアート制作の提案であった。

最初の版木制作では、仕掛けた我々側が教えられることばかりだった。もともとの構想としては、ボタン、糸、アルミ箔などの身近にある様々な物を版木に貼り付けて、多少でも面白い絵柄を作成してもらえれば良いといった程度の構想は描いていたものの、結果は正直言って逆に想定を裏切られる結果となった。ほぼすべての版木が版画を刷ることをしなくてもそのままがアート作品と呼ぶことのできるものに仕上がっていた。作品のすべてが抽象画とでも呼ぶべきレベルのものになっていた。あまり作為的な構想無しに構成していく造形的な制作のあり方のお陰もあるのか、非常に面白い作品に仕上がっていた。健常者であればどうすれば美しいバランスになるかを考えて制作をしていくのであろうが、そういった他者的な美意識の観点などを意識せずに、ある意味純真無垢な気持ちで創作に向かった結果、このような良い作品に結びついたものだろうと推測する。

この点は学生にとっても同様の意識だったようで、いわゆる単純なデザインのプロセスによる問題発見、そして問題解決のデザイン発想とは異なる経験である。そういった意味でデザイン活動の幅の広さを発見できたことは、大きな収穫であった。

初年度の研究テーマ推進でデザイン的な教育効果の学びとしては、換言すると課題を捉えていく上でデザインのテーマ自身をどのように定義するのかを学べたことが挙げられる。

デザインの業務はデザインの対象が具体的なものだったとしても、デザインを進めるにあたって着目する点を発見するには、関わる多くの要素から思考錯誤の作業によって着眼点を見つけ出す過程が必要となる。

特に今回のような研究テーマの場合は、「制作物の研究」としか規定されておらず、そのような枠組みから学生が自分たちの課題を見つけ、定義付けをしていくプロセスはかなり高度なデザイン作業といえるものだった。ある意味の偶然性にも恵まれたが、版木自身がアートになるとの気付き含め、デザインのテーマ自身を見極めていく過程を経験できたことは大きな学びにつながったものと考えられる。

## 5.2 2年目の活動でのデザインの教育的効果

2年目については、筆者も相応に心構えをして臨んだつもりではあったが、また多くの発見があったのも事実であった。1年目は通所者に作業をしてもらうにも、作業を上手におこなっていただくことが、第一と考える必死にサポートしていた。

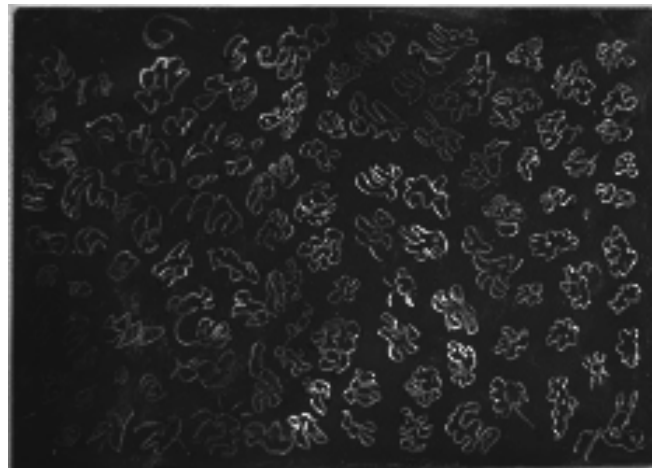


図 23. アート性の高い作品事例

しかし、2年目となって多少の余裕が出てきたこともあり、卒研生とともに通所者の作業を見守ることに時間を割けるようになって、アート制作の過程を観察していた。その過程で面白い事実を発見した。数名の作業者が、自分がアート制作をする過程で自分なりに、アート制作の作業によって美しい効果や面白い絵柄ができることに気が付いて、それを繰り返していることである。通所者の方に、なぜこの作業を繰り返しているのと問を掛けても、面白いでしょう、あるいは綺麗でしょうとしか返答をしてくれないのだが、明らかにそこには、美的感覚やアートの試みとして面白い表現が見えてきていることを理解しておこなっていることは事実であった。通所者の方自身では、それを分析してどのような意味があるかを語ることはできないが、大げさに言えば芸術的な創作意欲が出てきている局面であった。

図 23 はある通所者が描いたスクラッチ手法による作品である。この通所者は梅の花のようなパターンを紙面全体に細かく、丁寧に時間を掛けて描いていた。他の通所者が、二時間に2作、3作と仕上げている時間を掛けて、一つの作品を仕上げている。引っ込み思案の性格もあって、本人に凄い作品ですねといってもたいしたことはないとは卑下して対応するものの、この執着心、熱心さには頭が下がる作品である。こういった作品を作成できる、性格や技能といったものはもう少し研究を進めなければなんともいえないが、学生にとっては、デザインやアートは専門家がするものといった理解を大きく覆すものになったに違いない。

2年目でのデザイン視点での学びとして大きかったのは、現場で観察する体験だったといえる。デザイン分野でのこの現場観察という手法はエスノグラフィーと呼ぶもので、文化人類学などの分野で使われている手法である。現場に出向きデザイン課題となる対象者

がどのような行動を取っているかを観察し、そこからデザインの糸口を見つけ出す手法である。

2年目の「制作物の研究」は、通所者の方々に楽しい体験、面白い体験を味わってもらうことを目的としたため、観察の手法は有効だったといえる。そしてこの手法を学んだことは、重要なデザイン手法の学びの体験につながったものと考ええる。

## 5. まとめ

本稿では学外の組織の抱える課題を起点としたデザイン研究のテーマを卒業研究として取り組んだ結果がもたらす教育的な効果についてまとめた。

一般的な教育効果としては、対外的なコミュニケーション含めた社会性の学びの効果である。学外の方との接触、そして現実の課題と向き合うことで、学生の社会性は大きく培われる。

一方、デザイン的な観点での教育効果については、1年目、2年目とやや異なる学びの効果を得ることができた。

1年目には、課題を捉えていく上でデザインのテーマ自身をどのように定義するのかを学ぶことができた。そして、2年目にはエスノグラフィーと呼ばれる現場観察からデザインの糸口を見つける手法を学んでいた。

学外の組織と連携することで学生にとって大変多くの経験、そして学びができたことが確認できた。実社会に出ると当たり前のように様々な種類のデザイン課題に遭遇することとなる。その度に最適な手法を用いて、デザインテーマ自身を定義していくことが必要となるが、そういった経験を学生の時代にしておくことは、学生自らの持つデザインの知識や能力を格段に広げることにもつながるものと考ええる。

今後も学外組織と連携したテーマの推進を通じて学生の学びの幅を広げることに努力していきたいと考えている。

## 謝辞

最後に本研究を進めるにあたりご協力いただいた「岐阜県恵那市福祉協議会障害福祉サービス事業所明智ひとつばたご」の職員の方々に、本稿の場を借りて厚く御礼申し上げます。

## 注釈

1) [1]障害福祉サービス事業所明智ひとつばたご「障害福祉サービス 就労継続支援B型事業所」として恵那市より指定管理を受け運営している事業所。

住所：〒509-7704 岐阜県恵那市明智町 407-1

Web ページ：

[http://www.ena-shakyo.or.jp/modules/handicaped/index.php?content\\_id=1](http://www.ena-shakyo.or.jp/modules/handicaped/index.php?content_id=1)

[平成 27 年 10 月 19 日閲覧]